

現場に合った自社開発RPAで「Robota」を使いこなす — 経理承認の作業時間75%削減が実現

株式会社クラレ

事業内容 ●樹脂・化学品の製造、販売
●繊維の製造、販売

kuraray



左から木澤 崇氏、赤澤 誠治氏、武村 香那氏

高機能樹脂や繊維製品などの製造販売を手がける、株式会社クラレ。「世のため人のため、他人(ひと)のやれないことをやる」を使命として独創性の高い技術を磨き、世界シェアNo.1の事業や製品をさまざま生み出してきた。

同社は、全社でDXを推進するべく4つの重点分野「カスタマーエクスペリエンスの改革」「業務プロセスの改革」「ビジネスモデルの改革」「研究開発・生産技術シミュレーション」を設け、デジタルによるプロセス変革に取り組んでいる。

今回、財務経理分野において承認業務の効率化を実現するべく「Robota」を導入いただいた。導入の背景と効果、今後の展望について、同社 大阪経理財務部 部長の赤澤氏、大阪経理財務部 資金管理グループ 木澤氏、武村氏の3名に話を伺う。

背景・課題

経理承認業務の効率化と精度向上に向け、AI-OCRの活用を決断

——御社におけるDX推進の取り組みについて、概要をお聞かせください。

赤澤氏：当社が掲げるDXビジョン「デジタルを経営に取り込み、高い競争力を持って常に進化し、世の中に貢献する」のもと、各部署が業務のデジタル化やデータの分析・活用をはじめとしたさまざまな取り組みを主体的に推進しています。

私たち大阪経理財務部では、紙の書類をベースとした業務プロセスや支払・請求といった単純な反復作業に改革の余地を見出し、“自分たちで使う仕組みは自分たちで作る”をモットーに多様な技術を駆使してEUD (End-user development)に取り組んできました。

——「Robota」を導入いただいた背景や、当初抱えていた課題とはどのようなものでしたか？

赤澤氏：当時は、承認業務による経理担当者への負担が大きな課題となっていました。ピーク時では1日あたり約1,000件の請求書支払と約500件の経費精算が発生しており、各申請についてすべての項目を目視でチェックした上で承認を行うという作業を、20名ほどの担当者が担っていたのです。



経理・財務本部
大阪経理財務部
部長
赤澤 誠治

武村氏：請求書や領収書にはさまざまなフォーマットがありますから、1枚の紙とはいえ必要とする情報

がどこに書いてあるかを探すには非常に時間がかかります。インボイス制度導入後は適格請求書発行事業者登録番号の有無など確認事項も増え、承認作業には平均して1件あたり120秒ほどの時間がかかるように。月末や月初など皆さんからの申請が集中する時期は、手を動かしても動かしても終わらないという感覚でした。

さらにそれと並行して間違いの修正や問い合わせ対応、他の担当業務も進めなければならず、非常に大変でしたね。



経理・財務本部
大阪経理財務部 資金管理グループ
F&Aデジタル推進グループ
武村 香那

赤澤氏：またそうした負荷の高い作業を人の手で続けていれば、チェック時の見間違いや見落としも発生しかねませんから。チェック・承認作業を効率化するとともに精度を高めることを目的として、AI-OCRの活用を検討するようになりました。

——「Robota」を導入いただいた決め手はどのような点でしょうか。

赤澤氏：SAP Concurのイベントに参加して「Robota」の存在を知り、“経理特化型AI-OCR”だからこそその機能と精度に期待して導入を決めました。1～2ヶ月試しに利用してみる中で、座標指定をしなくても求める項目をしっかりと読み取ってくれる精度の高さに満足し、その後も利用を継続しています。

UIや付加機能が組み込まれたプラットフォーム「Remota」もありますが、現場の業務のあり方や私たちが目指すゴールをふまえてカスタマイズの必要性を感じたことから、「自分たちでRPAを設計・開

発してRobotaを使いこなす」という方針で進めていきました。

導入効果

Robotaによる自動化で、1件の承認に要する時間は120秒から30秒に

——現在、承認業務において「Robota」をどのように活用されていますか？

木澤氏：「Robota」で解析したデータと請求書管理システム「Concur Invoice」や経費管理システム「Concur Expense」に入力されたデータをExcelファイル上で並べ合わせて、自動照合する形で運用しています。

——「Robota」を導入いただいたことによる効果をお聞かせください。

武村氏：これまで目視で行っていた形式的なチェックが自動化され、1件あたりの承認にかかる時間が約120秒から約30秒に短縮されました。

また金額や振込先の確認などミスが許されない作業を一定の精度で「Robota」が担ってくれることで、気持ちの面でも負担が軽減されたと感じます。1件ずつ目視で確認していた頃には戻れないですね。

木澤氏：担当者の負担軽減と精度向上という目的を達成できたほかに、副次的な効果もありました。Excelファイル上での管理によって共同作業が可能になった上、データの蓄積や呼び出しも行いやすくなり、「担当者間でのナレッジの共有」という別の課題の解決にも繋がりました。またファイルごとに伝票を分けて管理・分配することで、担当者ごとの業務量の調整

も容易に行えるようになるなど、現場の業務にさまざまな変化が生まれています。



経理・財務本部
大阪経理財務部 資金管理グループリーダー
大阪経理財務部 与信管理グループリーダー
F&Aデジタル推進グループ主管
木澤 崇

——プロジェクト成功の要因はどのようなところにあるとお考えですか？

木澤氏：業務の心臓部分として「Robota」を用いることを軸としながら、それをどう活かすかは現場を知る自分たちで考えて、まずは“不完全なまま”で導入し、運用しながらユーザーのニーズに合わせて柔軟に設計を変化させていく……そんなEUDならではのアジャイルな取り組み方ができたことが、一つの成功要因だと捉えています。

「実はこんなニーズもあるのではないか」「この課題も一緒に解決できないか」と考えを派生させながら構成を変えていく場面が多々ありましたよね。



赤澤氏：「見やすいようにファイルを分割してほしい」という声が現場の担当者から開発者に直接届き、翌日には形になる。そのスピード感がよかったですね。ベストプラクティスに業務を合わせるのではなく、初めから完璧を求めて時間をかけて作り込むのではなく、“今”のニーズや環境にフィットするものをリリースしてよくしていけた手応えがあります。

また「この疲弊した業務をどうにかしなければ」と現場のリーダーの率先垂範でプロジェクトを推し進めていったこと、その思いに賛同してくれた多くの仲間を巻き込みながら民主的なやり方で定着に繋がられたことも、ポイントだったかなと思います。

今後の課題と展望

会計的なチェックの強化と、効率や精度の改善に取り組む

—今後の展望と、その中で当社に期待されることがあればお聞かせください。

武村氏：今後も経理領域における法令対応は続き、経理承認業務の負担は大きくなっていくと考えられます。各担当者が少しでもスムーズかつ効率的に処理を進められるように、「Robota」の導入効果を最大化するべく、引き続き解析プロセス・結果の改善に時間をかけ

て取り組んでいきたいと思っています。「Robota」による読取精度の向上や、処理時間を短縮するための運用面での工夫などについて、今後もしばらくご支援いただければ幸いです。

木澤氏：また「Robota」導入によって空いた時間を活かして、事業部門や生産部といった現場の皆さんのサポートをしたり、今回可能になった複数人での共同作業を通して自分では気づけなかったような知見を得たりと、今回のプロジェクトをきっかけとして経理業務をよりよくしていくことにも取り組んでいきたいですね。

赤澤氏：形式的なチェックを「Robota」に任せられるようになりましたから、今後はより人の判断が必要とされる会計的なチェックに重点を置きながら、この部分でも効率化と精度向上に挑戦したいと考えています。生成AIをはじめとした新たな技術の活用も視野に入れながら現場起点でアジャイルに取り組んでいきますので、その過程ではファーストアカウンティングさんにぜひサポートをお願いできればと思います。

世の中の急激な変容を背景に、経理 / バックオフィス機能の役割や業務のあり方を見直すことが求められる今、「Robota」を手がかりにさまざまなツールや技術を活用してイノベーションを進められたこと、経理業務自体を変えるチャレンジができたことは、幸運だったなと思っています。ありがとうございました。今後とも、よろしくお願いいたします。

記事の内容は、2024年4月25日時点での情報です。

FAST ACCOUNTING

ファーストアカウンティング株式会社

独自の AI-OCR 技術で紙証憑をデジタル化することで、
経理の負担を軽減し、貴社の生産性向上を支援いたします。

<https://www.fastaccounting.jp/>

